

## 第二部大規模感染症予防・制圧体制検討分科会（第25期・第18回）

### 議事要旨

1 日 時 令和4年8月23日（火）19:30～22:30

2 会 場 ビデオ会議

3 参加者(敬称略)

分科会委員： 相澤彰子、秋葉澄伯、岡本尚、郡山千早、小松浩子、高井伸二、  
高倉弘喜、中川晋一、糠塚康江、平井みどり、三鴨廣繁  
(委員13名中11名出席)

オブザーバー： 岩崎博道、神田玲子、喜連川優、楠正憲、坂口剛正、白井千香、  
杉山雄大、武田洋幸、田中純子、丹下健、豊田正史、中村眞、芳賀猛、  
山下輝夫

講演者： 平田晃正、高倉弘喜、筒井俊之、高井伸二

事務局： 増子、山田、穴山

#### 4 議 事

##### (1) 分科会の活動について

「見解」案に関して議論が行われた。

秋葉委員長より

- ① 高危険度病原体感染症への対応に関する「見解」案を作成すること、
- ② 日本学術会議の他の分科会、WGなどが検討している「意思の表出」の  
関連情報を集め、本分科会が準備している「見解」との調整をはかること  
との提案があり、了承された。

##### (2) 情報提供

###### ① 「新型コロナウイルス感染症第7波の分析事例」

平田晃正氏

(名古屋工業大学先端医用物理・情報工学研究センターセンター長・教授)

《概要》

- ・東京都モニタリング会議資料（2022/7/21）に基づく、9月末までの新規陽性者数、重症者数、死者数の予測。BA.2系統からBA.5系統への移行と感染力
- ・東京におけるTwitter数の減少に伴う影響、ワクチン感染予防効果の低下  
無症状感染者数、感染力等の考慮すべき要素
- ・最近のデータを反映した点（検査数のトレンド及び盆時期の行動を加味した新規陽性者数および重症者数のプロジェクション）

《質疑応答、コメント》

Q：予測のタイムラグはどれくらいか。

A：夏の換気が重要なカギとなり、6月末の猛暑により感染が拡大したので、天気予報の長期予報を加味する必要がある。毒性については、それほど弱くなく、オミクロンと同等という見方をしている。ワクチン4回目のタイミングがちょうどよかったため、感染者がでても重症者数、死者数はほぼ前回と同程度で収まったと考える。

Q：坂口先生にご意見を伺いたいが第8波はどうか、変異ウイルスは今後出てくるのだろうか。

A：BA.5株の感染力がBA.2の1.3倍であれば、「波」となる可能性がある一方、ウイルスが今より重症化することは無く、追跡する必要はなくなるかもしれない。普通の風邪と同じ扱いになるとすると、「波」と考える段階でなくなっていくとも考えている。

②「新型コロナ対策におけるIT活用の比較（日本とスペイン）」

高倉弘喜氏

（日本学術会議特任連携会員、大規模感染症予防・制圧体制検討分科会委員、大学共同利用機関法人情報・システム研究機構国立情報学研究所教授）

《概要》

- ・日本とスペインの感染状況の差（2022年7月）
- ・日本・スペイン間における出入国手続き、検査状況、保険
- ・スペイン国内での状況（PCR検査等）
- ・「MySOS（入国者健康居所確認アプリ）」への登録
- ・米国の感染対策の状況
- ・我が国のデジタル化の現状…例外処理を想定していない
- ・MySOSの課題、今後の懸案事項

（3）講演

①「我が国の動物衛生に関する制度と現状について」

筒井俊之氏（立命館大学食マネジメント学部教授）

《概要》

- ・獣医師の公的役割（就労状況、公務員獣医師の役割）
- ・動物疾病の発生状況（重要家畜伝染病 発生農場における防疫作業、世界の発生状況）
- ・日本の動物衛生制度（家畜伝染病予防法、動物衛生制度の仕組み）
- ・海外の状況（動物衛生研究機関、国際獣疫事務局）
- ・動物衛生分野における課題（世界的な動物疾病の流行に対する備え、動物疾病に関する研究の強化）

《質疑応答》

Q：2021年冬の鳥インフルエンザ流行は、サハラ砂漠の北と南で流行ということだが、渡り鳥、シベリアからの鴨と思ってもよいか。

A：人移動や畜産物持ち込みなどの説もあるが、基本的に渡り鳥の可能性が大きい。ただ実際すべての野鳥を検査しているわけではなく、持ち込まれた後に在来の野鳥で維持されていた可能性がある。感染がないのか、感染が見つかっていないだけかの判定は難しい。

Q：H5N1～H5N8 等の家畜伝染病が変異し、人獣共通感染症として、大流行を起こす可能性があるという意見についてはどうお考えか。

A：当初香港で出たころは、直ちに人に広がるような変異が警戒された。最近はずぐに人で流行するような変異を起こすものではないという意見もあるが、H5N8 等の人での感染事例はあちこちで出てきているので、警戒が必要である。

## ②「我が国の動物検疫と感染症：野生動物を取り巻く 30 年一生息数・生息域の拡大の背景と原因」

高井伸二氏

(日本学術会議第二部会員、大規模感染症予防・制圧体制検討分科会委員、北里大学名誉教授)

### 《講演概要》

- ・過去 30 年の新興、再興感染症
- ・アフリカ豚熱 (ASF) の発生状況とウイルスの侵入
- ・日本における野生動物の急激な増加
- ・日本の野生動物を取り巻く環境の変化と要因
- ・野生動物による農作物被害状況と「鳥獣保護法」改正 (平成 26 年)
- ・野生動物増加に至る複数要因
- ・野生動物利用拡大への取り組み (野生鳥獣肉衛生管理に関する指針)
- ・海外の衛生管理規定との比較
- ・外来生物種の問題 (外来種の野生化と感染症、日本の外来種対策と行政)
- ・欧米各国地域の野生動物サーベイランス
- ・継続的な野生動物研究調査の必要性と野生動物疾病センター (データバンク・バイオバンク)

### 《質疑応答、コメント》

Q：野生動物がここまで増えているという認識はこれまでなく、そこに潜む病原体については今後注意すべきであろう。人型結核にシカや豚が感染し、日本中に広がる可能性はないのか。重症熱性血小板減少症候群 (SFTS) に猫も感染しているのは、シカ由来なのか。

A：シカ等野生動物からダニを介して犬猫や人に感染する。基本的に猫は室内飼育率が高く感染拡大する可能性は低いが、観光資源の島などの猫で感染が広まるのは危険だろう。

Q：野生動物の個体数管理と狩猟とは、合わせて考えるべきではないのか。食肉対策にならない個体数管理についてどうすべきか。また鳥インフルエンザ等の農業的損失は算出できるが、感染した人間の医療費に対する損失額をいかに算定しうるか、国としていかに投資すべきかという問題と関わると思う。

A：禁猟期外でも獣害駆除を行っているが、実際には猟友会に丸投げ状態のため、

ハンターの高齢化等の問題も生じている。本気で管理するためには、国が積極的に考えていく仕組みが必要で、インセンティブを作るだけでは根本的解決にはならない。SFTS についても、野生動物が具体的にどう絡むかが顕在化し、問題化するまで時間がかかるので、まだよくわからない部分もある。

Q： 猟師をやりたい若い世代は増えつつあると聞くと、ビジネスとして成り立つ道はないのか。

A： 農水省事業でハンター育成の研修を行っている。駆除シカの利用率は低く、ペットフードにする動きも始まりつつあるが、野生動物が最終的に減った時に、ビジネスが成り立つかという問題もある。

Q： 奈良公園のシカの感染症が懸念されるが、対策はあるだろうか。

A： 定期的な採血、糞便検査等健康診断が良いのではないかと。野生動物の都市居住圏への接近には今後も警戒が必要である。

・「ワンヘルス」という概念はまだ浸透していないが、動物や生態系の健康にどのように人間の健康が絡んでいるかという問題を先回りし解決することは重要である。プロのハンター育成、ジビエ（野生鳥獣の食肉）供給への補助金等がビジネスとしてある程度成立するモデルができればよい。

また、国際情勢も鑑み国内自給率を高めることは、耕作放棄地の整備と合わせて、野生動物の管理につながる。国内食糧生産をどうするかについては、第1次、第2次産業を第3次産業と繋げ、可視化していくことが重要である。野生動物についても、食糧問題やカーボンニュートラル等と絡め学際的に議論していく必要がある。

—— 以上 ——